

大雪のなか、熱々のセミナー開催

特集にあたって

平成24年度の環境保全研究所公開セミナーが、12月1日と8日の土曜日に、それぞれ飯山市と木曽町を会場にして開催されました。両日ともに予想もしない大雪となってしまいましたが、そんな天候にもかかわらず、会場がいっぱいになるくらいの大勢の方々に参加していただくことができました。今回セミナーを共催し、準備にご協力をいただいた飯山市と飯山市教育委員会、そして木曽町と「エコネットきそ」の皆様、心からお礼を申し上げます。以下に各会場のセミナーの様子をご報告します。



飯山会場での講演風景

<飯山会場>

県北部の飯山市とその周辺の地域は国内有数の多雪地です。なだらかな関田山脈のブナ林や里山の生きものでも知られています。

講演では、はじめに飯山在住の井田秀行信州大学准教授が、研究テーマのブナの生態や特徴をわかりやすく解説されました。また里山の春植物カタクリについてそのた

くみな生き方や人の暮らしとのつながりを説明されました。

次いで鍋倉山で発見され新種記載されたナベクラザゼンソウについて大塚が解説しました。信州大学の渡辺隆一教授らにより注目された経緯、近縁なザゼンソウやヒメザゼンソウとのちがい、東北などでの標本調査や現地調査

2012年度公開セミナーの概要

	飯山会場	木曽会場
テ ー マ	北信濃・いいやまの自然といのち ～その遺産を未来につなぐ～	すごいぞ 木曽の大自然 ～めぐるいのちと多様性～
日 時	12月1日(土) 午後1～4時	12月8日(土) 午後1～4時
会 場	飯山市公民館講堂 共催：飯山市・飯山市教育委員会	木曽合同庁舎講堂 共催：木曽町・エコネット木曽(木曽町環境協議会)
参 加 者	80名	120名
講演タイトルと演者	<input type="checkbox"/> 飯山の森と里の命のにぎわい(井田 秀行) <input type="checkbox"/> ナベクラザゼンソウの不思議(大塚 孝一) <input type="checkbox"/> オオルリシジミの保全活動(福本 匡志) <input type="checkbox"/> 多雪地の飯山と気候変化(浜田 崇)	<input type="checkbox"/> 木曽地域の地形と地質の多様性(富樫 均) <input type="checkbox"/> 世界からみた木曽の魅力(永井 信二) <input type="checkbox"/> 木曽の河川と魚たち(北野 聡) <input type="checkbox"/> 木曽の草原利用の歴史と保全(須賀 丈) <input type="checkbox"/> 木曽地域のニホンジカ被害対策(岸元 良輔)



飯山会場でパネル展示を熱心に見る参加者

でわかってきたこと、また果実のネズミによる捕食のセンサーカメラによる発見や、発熱する植物であることの見発見などについて述べました。

つづいて「北信濃の里山保全を活用する会」事務局長の福本匡志氏が、オオルリシジミを中心とした里山の保全活動についての説明をされました。オオルリシジミは絶滅のおそれのある草原性のチョウで、県内3カ所と九州阿蘇地方に生き残っています。会の活動として、草刈りなどの環境整備、違法捕獲の防止活動、累代飼育による系統保存、野外での発生量などの調査のほか、刈り取ったスキを古民家再生のためのカヤとして活用しようという取り組みや親子観察会の開催など、生きものとの共存を地域活性化につなげようという意欲的な実践の数々を紹介されました。

最後に飯山盆地の多雪について、気象と地球温暖化の視点から浜田が説明しました。人が住む場所では世界でもっとも雪深い場所のひとつであること、多雪となる気象のメカニズム、飯山の平均気温が近年上昇していること、地球温暖化が進むと降雪が降雨に変わりやすくなることなどを述べました。

このあとの意見交換では、畦の補修管理をどのようにおこなうのがよいかといった身近で切実な話題から、多雪をもたらす一時的な気圧配置と地球温暖化による年単位での気候変化との関係といった学術的な話題まで、さまざまな視点から活発な質疑が交わされました。

<木曾会場>

木曾町は木曾山脈（中央アルプス）と飛騨山脈（北アルプス）の間に位置しています。名だたる山々とともに、美しい渓谷や、森林が広がり、自然においても文化においても独自の特徴をもつ地域です。

講演では、はじめに富樫が木曾駒ヶ岳と御嶽山という全く性格の違う3000m級の名山を対比させ、両者がわ

ずか30kmほどの水平距離で並び立っていることの意味について述べました。

続いて木曾町の多様な生物相に魅せられた昆虫学者の永井信二氏が、これまでミャンマーの奥地やルソン島などで行ってきた探検と調査研究にまつわる珍しい経験を紹介しながら、木曾のことを知るために、その外側のことをよく知ることも大切であることを話されました。

その次に北野は、木曾川流域のサカナたちを取り上げ、とくにアジメドジョウとヤマトイワナの生態や遺伝的な特徴について詳しく述べました。

さらに須賀は、開田高原等にみられる半自然草原を取り上げ、草原の起源やその歴史の変遷、そこに住むチョウなどの貴重種の保全の必要性について述べました。

最後に岸元は、近年深刻な問題となっているニホンジカによる農林業被害の実態とその対策について説明しました。

講演につづく意見交換会では、草刈りや里山保全をどうすすめるか、またかつての暮らしの中での体験を若い世代にどう伝えるかという問題、そして輸入に頼る日本の社会が、大きな物質循環からみて日本の里山の自然を変貌させている状況等が話し合われました。また、地域の観光パンフレット等の記述にもっと正確を期してほしいこと、今日のような話題をさらに観光や教育の中に活かしてほしいという意見や、ニホンジカの問題の深刻さがよくわかったという感想もいただきました。短い時間でしたが、大きな自然の成り立ちから、里山や特徴的な生き物たち、そしてニホンジカ対策までの幅広い話と、活発な意見交換ができた充実したセミナーになりました。



木曾会場での活発な意見交換会の様子

(企画担当：富樫 均・須賀 丈・小澤ゆきえ)